

パフォーマンス遂行前における体育教師からの 快／不快感情を喚起するメッセージの影響

石倉 忠夫¹

The Effect of Messages Evoking Pleasant or Unpleasant Feelings from Physical Education Teachers on Pre-performance

Tadao Ishikura¹

This study aimed to investigate the effect of messages that evoke students' pleasant or unpleasant feelings from their physical education teachers (PETs) on pre-performance, and whether the students' impressions of their PETs, along with their gender differences, influence the feelings evoked by their messages. We questioned university students (598 males, 535 females) about recollections of their high school's PET and evaluated their favorable impressions and feelings based on the assumption that the teachers provided messages that influenced the responses of the students. Two factors were extracted from the results of an exploratory factor analysis: "messages evoking pleasant feelings scale" and "messages evoking unpleasant feelings scale." Moreover, the students who had a good impression of their PET felt pleasure from the messages that were meant to evoke pleasurable feelings, and did not feel displeasure from the messages meant to evoke unpleasant feelings, as compared to the students who did not have a favorable impression of their PET. Female students felt more displeasure from the messages that evoked unpleasant feelings than did the male students. Consequently, these results suggest that the effect of verbal interaction with PETs on pre-performance affects students' pleasant or unpleasant feelings based on certain parameters, such as the student's degree of pleasant feelings for the PET and their gender differences.

[Key words] pleasant unpleasant feeling, physical education teacher, pre-performance, verbal interaction

本研究は、パフォーマンス遂行前において生徒の快または不快感情を喚起する体育教師からのメッセージを明らかにし、そして生徒の体育教師に対する好感の程度と性差を検討することを目的とした。大学生 1186 名(男性 598 名, 女性 535 名)を調査対象者とし、高校の時の体育教師を回想させ、その体育教師から感情喚起メッセージを受けたと想定した時の快／不快感情の評価を求めた。探索的因子分析の結果、2 因子が抽出され「運動前快感情喚起メッセージ尺度」「運動前不快感情喚起メッセージ尺度」と命名した。また、体育教師に好感を持つ生徒は好感を持たない生徒に比べて運動前快感情喚起メッセージに対して快く感じ、運動前不快感情喚起メッセージに対して不快に感じない。そして女性大学生は男性大学生に比べ運動前不快感情喚起メッセージに不快に感じる事が示された。これらの結果からパフォーマンス前における体育教師からの感情を喚起するメッセージは、生徒の体育教師に対する好感の程度や性別を媒介変数とし、快／不快感情に影響することが示された。

[キーワード] 快／不快感情, 体育教師, パフォーマンス遂行前, 言葉かけ

I. 緒言

体育やスポーツ活動において、教師や監督・コーチ(以下、指導者とする)の言葉かけは児童・生徒や選手(以下、活動者とする)の感情、さらには活動に対する動機づけやパフォーマンスに大きく影響するため、パフォー

マンス遂行直前の言葉かけは重要になると言えよう。ここで本研究では、感情を情動や気分を含む包括的なもの(本多, 2012)として捉える。また、情動は「急激に生起し、比較的短時間のうちに消失する強い感情」、気分を「数時間から数週間単位で持続する比較的弱い感情状態」と定義する(濱・鈴木・濱, 2001)。

1 同志社大学スポーツ健康科学部 (Faculty of Health and Sports Science, Doshisha University)

スポーツ活動における感情は、①顔の表情、自律神経システムの活性化などの身体面、②パフォーマンス中の注意の焦点づけ、知覚、意思決定や情報の再生を含む認知面、そして③スポーツ活動そのものやそれに関連する事柄に対する取り組みの動機づけに影響することが明らかにされている (Jones and Uphill, 2012)。石倉 (2015b) は、タイミング課題のパフォーマンス後に学習者に快感情あるいは不快感情を喚起するメッセージを与えたところ、快感情メッセージが与えられると肯定的感情が上昇し、不快感情喚起メッセージが与えられた時よりも心拍数が高くなるという傾向が見られたことを報告している。一方、キー押し課題を用いた運動スキルの学習において、練習中に罰を与えた条件はパフォーマンス向上に有効であったが、練習中に賞を与えた条件は練習後のテストにおいて最も学習効果が得られることが報告されている (Wächter ら, 2009)。さらに、練習後に賞賛を受けた条件は、他の学習者が賞賛を受けた条件と賞賛なしの条件に比べて突然の再生テストの高いパフォーマンスを示したことが報告されている (Sugawara ら, 2012)。また、Amorose and Horn (2000) はパフォーマンスの成功に対する指導者の教示的フィードバックや失敗に対する励ましのフィードバックが、より高い有能感の認知や感情を通じて、内発的動機づけに影響することを報告している。小学生を対象とした研究では、体育活動において指導者や他児童からの言葉を受けた経験の多い児童ほど他者受容感が高まり (吉村・日角, 2005)、具体的な内容の言葉かけは学習意欲 (江藤, 2005) や活動のめあての明確化に影響する (赤沢ら, 2013) ことが報告されている。これらの報告は、感情は活動者の身体面、認知面、そして動機づけの面に影響することを裏付けていると言えよう。

筆者はこれまで、活動者のパフォーマンスが成功した時および失敗した時に快/不快感情を喚起する指導者からのメッセージを明らかにし (石倉・藤本, 2014)、パーソナリティと快/不快感情喚起メッセージに対する反応について検討してきた (石倉, 2015a; 石倉, 2016)。その結果、内向的な者は快感情を喚起するメッセージに対して反応しにくく、温かいパーソナリティの持ち主は冷たいパーソナリティの持ち主よりも失敗した時に快感情を喚起するメッセージに対して反応しやすい。そして、外向的な者が快感情を喚起するメッセージを受けると否定的感情が高くなるという特徴が見られた。気分の変化に及ぼす影響について検討したところ、情緒的安定性の高い者はそうではない者に比べ、快感情を喚起するメッセージの聴取が終わってから時間が経過すると肯定的感情が低く、否定的感情が高い傾向にあるという特徴が見られ

た (石倉, 2017)。また、タイミング学習において不快感情を喚起するメッセージが練習時に与えられた条件は、快感情を喚起するメッセージが与えられた条件やメッセージが与えられなかった条件に比べて不安定なパフォーマンスを示すという特徴が見られた (Ishikura, 2017)。さらに、石倉 (2018) は、活動者のパーソナリティに加え、運動に対する態度 (運動意欲) や指導者に対する好感の程度など、活動者の感情喚起に作用する個人差変数を加えて検討する必要があることが指摘されている (Smoll and Smith, 1989) ことを鑑み、成功時あるいは失敗時における快/不快感情喚起メッセージに対する反応とパーソナリティ、運動意欲および体育教師の好感度との関係について検討した。その結果、全体的にパーソナリティそして運動意欲が教師に対する好感の程度を介し、感情喚起メッセージに対する快/不快感情喚起に作用していることが明らかにされた。つまり、指導者を好意的に思う者ほど成功しても失敗しても快感情を喚起するメッセージに対しては快く感じ、教師を好ましく思わない者ほど男性は成功時の、女性は失敗時の不快感情喚起メッセージに対して不快に感じるという特徴が見られたことを報告している。これらの研究から、活動者がパフォーマンスを遂行した後に指導者から与えられるメッセージに対する快/不快反応は、活動者のパーソナリティや運動意欲、そして指導者に対する好感の程度の個人差変数によって異なる。また、練習時において快感情を喚起するメッセージの聴取は不快感情を喚起するメッセージの聴取よりも安定したパフォーマンスの学習効果が期待されるが、快感情を喚起するメッセージの聴取を続けると否定的な感情の高まりを示すパーソナリティ特徴が存在することが示唆された。しかしながら、これらの報告は活動者のパフォーマンス遂行後に指導者から与えられるメッセージを対象として得られた知見であるため、パフォーマンス遂行前の快/不快感情喚起メッセージが感情喚起に及ぼす影響について検討の余地が残されていると言えよう。

Hanin (2000) は感情状態とスポーツ・パフォーマンス・レベルとの関連性を説明する IZOF (Individual Zones of Optimal Functioning) モデルを提唱している。このモデルは、最高のパフォーマンスが発揮できる精神状態は競技種目や選手によって異なることを説明している。例えば、同じ競技種目において、ある選手は緊張した精神状態で良いパフォーマンスを発揮できるかもしれないが、他の選手は同様の精神状態で良いパフォーマンスを発揮することができないということである。IZOF モデルでは主観的経験の構造に関連する3つの要素 [種類 (form)、内容 (content)、そして強度 (intensity)] と主観的経験の変動過程に関連する2

つの要素〔時間 (time)、文脈 (context)〕によって階層的に構造化し、感情的反応を詳細に描写できるようにしている。このうち、内容 (content) 要素は快楽の傾向 (快-不快) とパフォーマンスにおける感情の衝撃 (適切-機能不全) で構成されている。したがって、パフォーマンス遂行前の指導者からの言葉かけに対し、活動者によっては快くまたは不快に感じる可能性が大きく、その後のパフォーマンスの出来栄を左右する可能性が十分に考えられる。

そこで本研究は、パフォーマンス遂行前に活動者が快く感じるまたは不快に感じる指導者からのメッセージについて明らかにし、さらに、活動者の個人差変数として指導者に対する好感の程度を取り上げ、快／不快感情喚起との関連性について検討することを目的とした。なお、本調査では指導者の好感の程度について回答を求めるため、人間関係のトラブルを回避するという意図から、大学生を調査対象として高校3年生時の体育教師を回想させて回答を求めることとした。体育教師に対する好感の程度と快／不快感情喚起との関連性については、石倉 (2018) が報告しているように、体育教師に好感を持っている者ほど感情喚起メッセージに対して快く感じる傾向が示されると予想された。

II. 予備調査

(1) 目的

パフォーマンス遂行前において、学習者が体育教師から受ける快または不快感情喚起メッセージを収集すること目的とした。

(2) 方法

D大学の学部学生 164名 (男性 101名, 女性 63名)

を調査対象とした。平均年齢は 20.2 歳 ($SD = 1.3$ 歳) であった。

調査は大学の講義中に実施した。体育実技のパフォーマンス遂行前を想定させ (例えば、逆上がりやシュート練習などこれからやろうとする直前)、体育教師から言われて快く感じるメッセージと不快に感じるメッセージを、それぞれ 5 つずつ回答を求めた。

(3) 結果

複数名で回答の重複等を確認しながら集計作業を行った。集計したメッセージのうち、3名以上が上げたメッセージを本研究で取り上げるメッセージとした。その結果、表 1 に示すように、快く感じる体育教師からのメッセージは 29 メッセージ、不快に感じる体育教師からのメッセージは 17 メッセージ、合計 46 メッセージとなった。

III. 本調査

(1) 目的

予備調査で収集されたメッセージをもとに、パフォーマンス遂行前における体育教師から受ける快または不快感情喚起メッセージ評価尺度を作成する。さらに、快／不快感情喚起メッセージに対する感情喚起の程度と性差および体育教師に対する好意の程度との関連性について検討することを目的とした。

(2) 方法

①調査対象者

大学生 1149 名 (男性 609 名, 女性 540 名) を対象に調査を実施した。平均年齢は 19.7 歳 ($SD = 1.3$ 歳) であった。

表 1 予備調査におけるパフォーマンス遂行前の快／不快感情を喚起するメッセージの集計結果 (カッコ内は度数)

快感情喚起メッセージ		不快感情喚起メッセージ	
出来る (53)	出来るまで付き合うよ (4)	誰でもできる (48)	練習しろ (3)
頑張ろう (32)	〇〇に気を付けてやろう (4)	出来て当たり前 (22)	早く出来るようになれ (3)
失敗してもいい (23)	あきらめるな (4)	ちゃんとやれ (21)	
大丈夫 (18)	さあ、いこう! (3)	失敗するなよ (18)	
思いっきりやろう (13)	上手になろう (3)	やっても意味がない (16)	
やってみよう (12)	応援している (3)	簡単だよ (14)	
楽しみながらやろう (11)	努力すればできる (3)	これぐらいは出来るだろう (14)	
リラックスして (9)	サポートするよ (3)	無理だ (10)	
自信を持って (7)	少しずつ上達しよう (3)	(他人) は出来ていた (7)	
いけるよ (7)	出来そうだね (3)	これが出来なかつたらだめだ (6)	
何回でもやったらいよいよ (6)	時間はたくさんある (3)	出来るまでやれ (6)	
やればできる (6)	いっぱい練習しよう (3)	出来るまで帰らせない (5)	
最初は出来なくても大丈夫 (6)	これが出来たら〇〇も出来るよ (3)	これが出来ないと言にならない (4)	
見ているから (5)	難しく考えなくていい (3)	君に出来るのかな? (4)	
最初はみんなできない (5)		やめておけ (4)	

②調査内容

調査は大学の講義中に実施した。

調査項目は、調査対象者の性別、年齢、高校3年生時の体育実技の担当教師の性別と好意の程度、そして、予備調査で収集した46メッセージに対する快/不快感情の評価であった。

高校3年生時の体育実技担当教師の好意の程度は、「好き」「やや好き」「どちらとも言えない」「やや嫌い」「嫌い」の5件法で回答を求めた。また、予備調査で収集した46メッセージに対する快/不快感情の評価については、高校3年生時の体育実技担当教師からパフォーマンス遂行前に受け取ったメッセージであると想定した時の感情を評価させた。感情の評価は「快」「やや快」「どちらとも言えない」「やや不快」「不快」の5件法で回答を求めた。

③分析方法

データ分析にはIBM SPSS Statistics ver.24とIBM SPSS Amos ver.24を使用した。

(3) 結果

①探索的因子分析

回答の分布の歪度を求めた結果、 $|1.2|$ 以上を示す項目が6項目示された。その項目は「無理だ」「出

来るまで帰らせない」「早く出来るようになれ」「これが出来ないと話にならない」「やっても意味がない」「(他人)は出来ていた」であった。これらの項目は分布に歪みがあるとみなし、探索的因子分析の対象項目から除外した。

IBM SPSS Statistics ver.24を用いて、主因子法による因子分析を行った。初期の固有値を検討したところ、固有値1.0以上を示す因子が5因子認められた。さらに、第2因子と第3因子の固有値の差が4.05で大きかったため、因子数を2に決定した。累積寄与率は48.46%であった。因子数を2と決定したときのプロマックス回転後の因子行列の結果から、因子負荷量の値.40以上の項目を絞って各因子に含まれている項目を確認した。このとき、2因子に含まれる質問項目と、内容的に曖昧な項目を削除した。分析の対象項目数は22項目に絞られた。次に、因子数を2と決定したときの探索的因子分析を再度行った。固有値1.0以上を示す因子が2因子認められ、この時の累積寄与率は52.63%であった。プロマックス回転後の因子行列の結果から、因子負荷量の値.40以上を示した項目は、第1因子で13項目、第2因子で9項目となった(表2)。

第1因子には「やってみよう」「最初は出来なくても大丈夫」「難しく考えなくていい」「少しずつ上達しよう」「サポートするよ」「〇〇に気を付けてやろう」「いけるよ」「リラックスして」「楽しみながらやろう」「失敗してもいい」「思いっきりやろう」「最初はみんなできない」「さあ、いこう!」

表2 プロマックス回転後の因子行列とメッセージ

項目	因子		メッセージ
	1 $\alpha = .923$	2 $\alpha = .884$	
33	.780		やってみよう
46	.763		最初は出来なくても大丈夫
45	.762		難しく考えなくていい
24	.753		少しずつ上達しよう
23	.748		サポートするよ
22	.740		〇〇に気を付けてやろう
44	.736		いけるよ
21	.734		リラックスして
32	.731		楽しみながらやろう
10	.709		失敗してもいい
9	.685		思いっきりやろう
11	.650		最初はみんなできない
1	.609		さあ、いこう!
31		.782	これぐらいは出来るだろう
7		.741	出来て当たり前
13		.722	練習しろ
12		.719	ちゃんとやれ
30		.714	失敗するなよ
42		.712	これが出来なかったらだめだ
16		.710	出来るまでやれ
19		.687	誰でもできる
25		.666	君に出来るのかな?

よう」「サポートするよ」「○○に気を付けてやろう」「いけるよ」「リラックスして」「楽しみながらやろう」「失敗してもいい」「思いきりやろう」「最初はみんなできない」「さあ、いこう！」といった運動開始前に快い気持ちにさせるメッセージが含まれているため、運動前快感情喚起メッセージ尺度(11メッセージ)とした。一方、第2因子では「これくらいは出来るだろう」「出来て当たり前」「練習しろ」「ちゃんとやれ」「失敗するなよ」「これが出来なかったらだめだ」「出来るまでやれ」「誰でもできる」「君に出来るのかな？」といった運動開始前に不快な気持ちにさせるメッセージが含まれているため、運動前不快感情喚起メッセージ尺度(9メッセージ)とした。

内的整合性を検討するために、クロンバックの α 係数を求めたところ、第1因子では.92、第2因子では.88であった。

②確認的因子分析

得られた回答のうち、無回答や重複回答など欠損値がある場合は分析対象から除外した。その結果、925名(男性474名、女性451名；平均年齢19.7歳、SD=1.3歳)が分析対象となった。

IBM SPSS Amos ver.24を用い、探索的因子分析で得られた結果の確認的因子分析を行った。始めに、探索的因子分析の結果をもとにパス図を作成した。その後、標準化推定値、重相関係数の平方、修正指数(修正指数の閾値は4)を算出するように設定して推定値を算出した。その結果、 $\chi^2=1595.49$, $df=209$, $p<.001$, GFI=.859, AGFI=.830, CFI=.865, RMSEA=.085, AIC=1683.485を示し、あてはまりの悪いモデルと判断された。また、2つの因子間の相関が低く有意ではなかった。そこで、この2つの因子間相関を0としたモデルで、推定値と修正指数の算出結果をもとにパス図を修正した。その結果、各メッセージに含まれる質問項目数は各因子に4メッセージずつとい

うことになった。モデル適合度指数の値は $\chi^2=175.90$, $df=20$, $p<.001$, GFI=.956, AGFI=.921, CFI=.946, RMSEA=.092, AIC=207.901を示し、最初のモデルよりもデータに適合した結果が得られた。表3に最終的なモデルの分析結果を示す。

③体育教師に対する好意の程度および性差と各メッセージに対する反応について

運動前快感情喚起および不快感情喚起メッセージに対する反応において、体育教師に対する好意の程度と性差の関係について検討するために、体育教師に対する好意の程度の回答を「好き」「やや好き」を「好きな方」に、「やや嫌い」「嫌い」を「嫌いな方」にまとめた。そして運動前快感情喚起メッセージの回答において「快い」を5点、「不快」を1点とした。一方、運動前不快感情喚起メッセージの回答においては「不快」を5点、「快い」を1点とした。それぞれの合計得点をメッセージ尺度得点とし、回答者の性別(男性/女性)×体育教師に対する好意の程度(好きな方/どちらとも言えない/嫌いな方)×体育教師の性別(男性教師/女性教師)による3要因分散分析を行った。なお、多重比較にはBonferroni法を用いた。

運動前快感情喚起メッセージ得点において、好意の程度要因による主効果が有意であり($df=2/1010$, $f=5.211$, $p=.006$, $\eta^2=.010$, $(1-\beta)=.831$)、体育教師が好きな方である場合は嫌いな方である場合よりも高得点であった(図1)。その他の主効果および交互作用は有意ではなかった。

運動前不快感情喚起メッセージ得点において、回答者の性別要因による主効果が有意であった($df=1/1005$, $f=7.152$, $p=.008$, $\eta^2=.007$, $(1-\beta)=.762$)。女性は男性よりも高得点であった(図2)。また、好意の程度要因による主効果が有意であり($df=2/1005$, $f=12.527$, $p=.001$, $\eta^2=.024$, $(1-\beta)=.996$)、体育教師が嫌いな方である場合とどちらでもない場合は好きな方である場

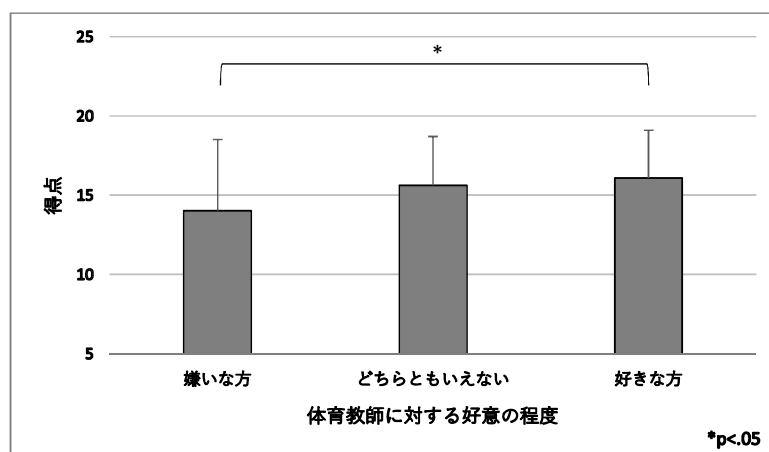


図1 パフォーマンス遂行前快感情喚起メッセージ得点における体育教師に対する好意の程度別の平均得点と標準偏差

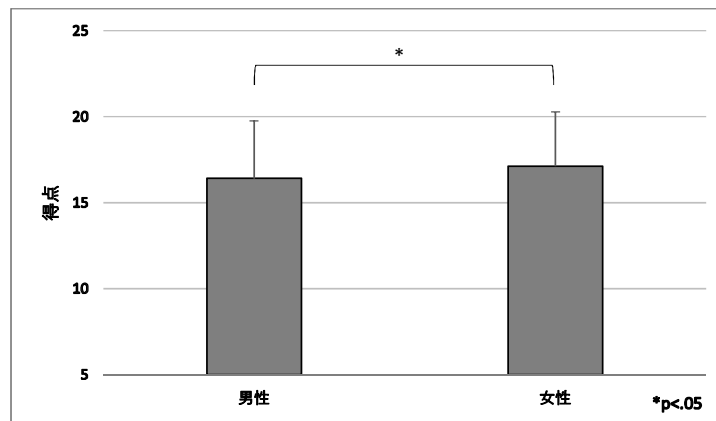


図2 パフォーマンス遂行前不快感情喚起メッセージ得点における男女別の平均得点と標準偏差

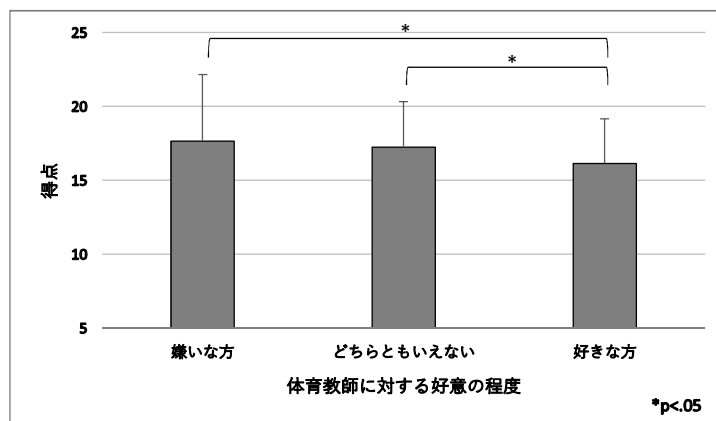


図3 パフォーマンス遂行前不快感情喚起メッセージ得点における体育教師に対する好意の程度別の平均得点と標準偏差

合よりも高得点であった(図3)。その他の主効果および交互作用は有意ではなかった。

IV. 考察

(1) 高校体育実技授業におけるパフォーマンス遂行前に体育教師から与えられる快/不快感情喚起メッセージについて

本研究では、まず、高校体育実技授業におけるパフォーマンス遂行前に体育教師から与えられる快/不快感情喚起メッセージを明らかにした。予備調査の結果、快感情を喚起するメッセージが29メッセージ、不快感情を喚起するメッセージが17メッセージとなった。

探索的因子分析を行う前に各メッセージの回答の分布を検討した結果、「無理だ」「出来るまで帰らせない」「早く出来るようになれ」「これが出来ないと話にならない」「やっても意味がない」「(他人)は出来ていた」に回答の偏りが見られた(歪度|1.2|以上)。これらの項目は回答に偏りが見られ、且つ生徒に不快感情を

喚起させるメッセージとして解釈できるため、殆どの生徒に不快感を抱かせるメッセージであるといえる。次に探索的因子分析を行い、その結果をもとに確認的因子分析を行った結果、「運動前快感情喚起メッセージ」「運動前不快感情喚起メッセージ」の2尺度に含まれるメッセージがそれぞれ4メッセージ抽出された(表3)。予備調査のメッセージ収集段階において、体育実技のパフォーマンス遂行前(例えば、逆上がりやシュート練習などこれからやろうとする直前)に体育教師から言われる快く感じるメッセージと不快に感じるメッセージを上げるよう調査対象者に回答を求めたため、「運動前快感情喚起メッセージ」「運動前不快感情喚起メッセージ」の各尺度にそれぞれ4メッセージが抽出されたのは妥当な結果であると解釈できよう。

(2) 体育教師に対する好意の程度および性差と各メッセージに対する反応について

本研究の分析結果から、体育教師が好きな方である場合は嫌いな方である場合に比べて運動前快感情喚起メッセージ尺度において高得点が示され、運動

表3 パフォーマンス遂行前における快または不快感情喚起メッセージの確認的因子分析結果（標準化推定値）

項目	メッセージ	快 M	不快 M
		$\alpha = .847$	$\alpha = .810$
45	難しく考えなくていい	.837	
46	最初は出来なくても大丈夫	.798	
33	やってみよう	.731	
22	〇〇に気を付けてやろう	.677	
13	練習しろ		.813
12	ちゃんとやれ		.767
16	出来るまでやれ		.700
7	出来て当たり前		.600
因子間相関		快 M	不快 M
		快 M	—
		不快 M	—

快 M：運動前快感情喚起メッセージ、不快 M：運動前不快感情喚起メッセージ
数値は標準化推定値である

快 M と不快 M の間の相関は 0 に固定されている

$\chi^2=175.90$, $df=20$, $p<.001$, $GFI=.956$, $AGFI=.921$, $CFI=.946$, $RMSEA=.092$, $AIC=207.901$

前不快感情喚起メッセージ尺度においては低得点が示された。この結果は仮説を支持するものである。石倉（2018）によると、パフォーマンス遂行後に指導者が与える快感情を喚起するメッセージは成功時でも失敗時でも体育教師に対する「好感」が高いほど快感情を喚起するが、不快感情喚起メッセージに関しては性差が見られ、体育教師に対して「悪感」が高いほど男性は成功時に、女性は失敗時に不快感情を示すことを報告している。本研究の結果においては、体育教師に対する好感の程度が高いほど快感情喚起メッセージと不快感情喚起メッセージに対して快く感じる特徴が示された。また、不快感情を喚起するメッセージに対し、女性は男性よりも不快感情喚起メッセージに対してより不快に感じるという特徴が示された。石倉（2018）が指摘しているように、好感を持つ体育教師からのメッセージに対しては快く受け止めるのは当然予想されることであると解釈されよう。したがって、本研究で得られた結果と石倉（2018）が報告する結果は次の3点にまとめることができる：①好感が持てる体育教師からのパフォーマンス遂行前後の感情喚起メッセージは、好感が持てない体育教師からの感情喚起メッセージに比べて快く感じる。②体育教師のパフォーマンス遂行前の不快感情喚起メッセージに対し、女性は男性に比べてより不快に感じる。そして、③好感が持てない体育教師からのパフォーマンス遂行後の不快感情喚起メッセージに対して、男性は成功したときに、女性は失敗したときにより不快に感じる。

Stellino ら（2012）はスポーツにおける感情に及ぼす社会的要因として親、コーチ、チームメイト、その他（観衆・ファン、審判・オフィシャルなど）を挙

げ、これらの作用因は選手の喜び、ストレスと不安に影響することを説明している。特にコーチは、スポーツ活動の場あるいはそれ以外の場における選手との人間関係、コーチング行動、そしてポジティブまたはネガティブな選手評価が選手の感情に影響するとされている。我が国においては、高校部活動における生徒と教師の関係性は間接的に内発的動機づけに大きく影響すること（松井、2014）、小学校体育授業における教師から児童への積極的な言葉がけは他者受容感の高まり（吉村・日角、2005）や学習意欲の向上を導く（江藤、2015；長谷川、2004）ことが報告されている。これらの研究成果は、スポーツや体育活動の指導者と活動者との人間関係、指導者の態度、そして指導行動が活動者の感情に影響し、さらには Jones and Uphill (2012) が主張するように、スポーツ活動や体育授業における身体面、認知面、そして動機づけに影響することを裏付けるものと考えられる。したがって、本研究で指導者に対する活動者の好感の程度がパフォーマンス遂行前の指導者の感情喚起メッセージに対する感情喚起の程度に影響するという結果が示されたことは、指導者と活動者の人間関係が活動者の感情に作用するという Stellino ら (2012) の知見を支持するものと解釈される。

V. 結論

本研究は、体育授業におけるパフォーマンス遂行前の体育教師の快／不快感情を喚起するメッセージを明らかにし、さらに体育教師の好感の程度と快／不快感情喚起との関連性を検討した。調査対象者は大学生とし、高校時に教わった体育教師を回想して調査を実施

した。分析の結果、快感情喚起メッセージ尺度、不快感情喚起メッセージ尺度においてそれぞれ4メッセージが抽出された。さらに、体育教師に対する好感の程度が高い者は、快または不快感情喚起メッセージに対して快く感じる傾向が示された。また、不快感情喚起メッセージについては、女子大学生は男子大学生に比べて不快に感じる傾向が示された。つまり、不快感情喚起メッセージに対しては性差が認められたということになる。これらの結果から、体育教師に対する好感の程度はパフォーマンス遂行前の感情喚起メッセージに対する感情喚起に作用するため、その後の体育活動における身体面、認知面、そして動機づけの面に影響する可能性が十分考えられ、体育教師と生徒との人間関係の重要性が示唆された。

今後の研究課題として、パフォーマンス遂行前の感情喚起メッセージに対する快／不快反応とパーソナリティおよび運動意欲との関係、そしてパフォーマンス遂行前の感情喚起メッセージが運動技能の学習やコントロールに及ぼす影響について検討していく必要性が指摘される。

参考文献

- 赤沢真世・築田尚晃・小沢道紀・大友智：大学生のサービスラーニングにおける運動指導が小学生の体育的活動に及ぼす影響の検討 —草津市における長縄オリエンテーションを対象として—。立命館高等教育研究, 13, pp107-120, 2013.
- Amorose, A.J. and Horn, T.S.: Intrinsic motivation: Relationship with collegiate athletes' gender, scholarship status, and perceptions of their coaches' behavior. *Journal of Sport and Exercise Psychology*, 22, pp63-84, 2000.
- 江藤真生子：小学校体育授業における教師の「言葉かけ」の検討 —表現運動とゲームの授業を事例として—。社日本女子体育連盟学術研究, 31, pp47-57, 2015.
- 濱治世・鈴木直人・濱保久：感情心理学への招待 感情・情緒へのアプローチ。サイエンス社, 2001.
- Hanin, Y.L.: Individual zones of optimal functioning (IZOF) model: Emotions-performance relationships in sports. In: Hanin, Y.L. (Ed.), *Emotions in sport*. Human Kinetics, pp65-89, 2000.
- 長谷川悦示：小学校体育授業における「個人の進歩」を強調した教師の言葉かけが児童の動機づけに及ぼす効果。スポーツ教育学研究, 24 (1), pp13-27, 2004.
- 本多麻子：感情・情動の生理学的機序。山崎勝男監修, スポーツ精神生理学。西村書店, pp26-37, 2012.
- 石倉忠夫・藤本愛子：パフォーマンス後に快／不快感情を喚起する情意的フィードバックメッセージ。同志社スポーツ健康科学, 第6号, pp47-56, 2014.
- 石倉忠夫：運動後に指導者から与えられる快／不快感情喚起メッセージと学習者のパーソナリティとの関連性。京都文教短期大学研究紀要, 第53集, pp79-89, 2015a.
- 石倉忠夫：タイミング技能学習における情動喚起フィードバックメッセージが学習者の気分と生理心理的指標に及ぼす影響。同志社スポーツ健康科学, 7, pp17-22, 2015b.
- 石倉忠夫：運動後の指導者からの快／不快感情喚起メッセージへの反応と学習者のパーソナリティとの関係 —主要5因子性格検査を用いて—。京都文教短期大学研究紀要, 第54集, pp1-10, 2016.
- Ishikura, T.: Effects of pleasant or unpleasant feedback messages on the leaning of timing. *Advance in Physical Education*, Vol.7, pp1-9, 2017.
- 石倉忠夫：運動活動後に指導者から与えられる快／不快感情喚起メッセージの聴取と感情の変化。京都文教短期大学研究紀要, 第55集, pp103-112, 2017.
- 石倉忠夫：高校体育実技における教師からの言葉かけは生徒の好感の程度によって快／不快感情喚起に影響するのか? —大学生の回顧によるアンケート調査に基づいて—。京都文教短期大学研究紀要, 第56集, pp103-115, 2018.
- Jones, M. and Uphill, M.: Emotion in Sport: Antecedents and performance consequences. In: Thatcher, J., Jones, M. and Lavallee, D. (Eds.), *Coping and Emotion in Sport. Second Edition*. Routledge, pp33-61, 2012.
- 松井幸太：高校運動部活動における生徒の内発的動機づけ —指導者のフィードバック行動および生徒と指導者の関係に対する生徒の認知からの検討—。スポーツ心理学研究, 第41巻第1号, pp51-63, 2014.
- Smoll, F.L. and Smith, R.E.: Leadership behaviors in sport: A theoretical model and research paradigm. *Journal of Applied Social Psychology*, 19, pp1522-1551, 1989.
- Stellino, M.B., Partridge, J. and Moore, K.: Social influence on emotion in sport. In: Thatcher, J., Jones, M. and Lavallee, D. (Eds.), *Coping and Emotion in Sport. Second Edition*. Routledge, pp118-142, 2012.
- Sugawara, S.K., Tanaka, S., Okazaki, S., Watanabe, K. and Sadato, N.: Social rewards enhance offline improvements in motor skill. *PLOS ONE*, 7 (12), e48174, 2012.
- Wächter, T., Lungu, O.V., Liu, T., Willingham, D.T. and Ashe, J.: Differential effect of reward and punishment on procedural learning. *The Journal of Neuroscience*, 29 (2), pp436-443, 2009.
- 吉村功・日角知世：体育における教師や仲間からの言葉かけが他者受容感に及ぼす影響。北海道教育大学紀要（教育科学編）, 56 (1), pp183-192, 2005.

謝辞

本研究を進めるにあたり、同志社大学スポーツ健康科学部非常勤講師 港野恵美先生に調査のご協力を頂いたことに感謝いたします。

本研究は MEXT 科研費 JP17K01651 研究課題「運動遂行前の情動喚起メッセージ聴取が運動学習に及ぼす影響」の助成を受けたものです。